

大橋王座返り咲き

東洋太平洋Sバンタム級タイトルマッチ

ボクシング

▽東洋太平洋スーパーバンタム級王座決定戦12回戦
大橋弘政 判定 ジュンリエル・ラモナル
(HEIWAWA) 55・0*
ライリビ 55・2*

(大橋は王座復帰)

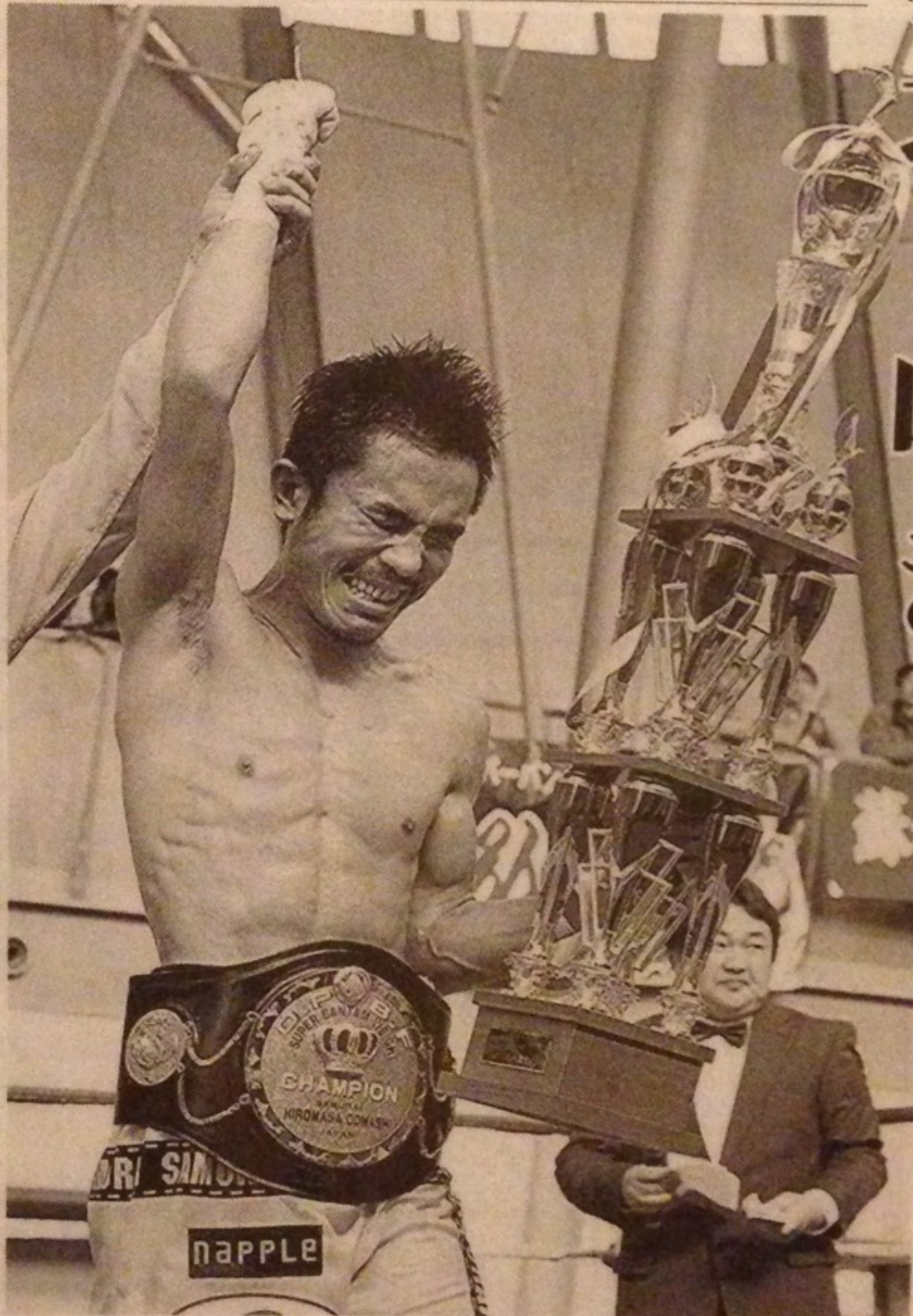
プロボクシングの東洋太平洋スーパーバンタム級王座決定戦12回戦が27日、愛知県刈谷市の産業振興センターあいおいホールであり、元王者で同級1位の大橋弘政(31)と愛知・HEIWAWAのラモナル(21)が、同2位のジュンリエル・ラモナル(21)とライリビに、2-1で判定勝ちし、1年ぶりの王者に返り咲いた。

接近戦で相手撃退

1年ぶりに手元に戻った東洋太平洋のベルト。判定で勝利を告げられると、大橋はリングに突っ伏し、感激の涙をあふれさせた。

10歳若いフィリピンの新鋭を、得意の接近戦で

迎え撃った。打たれてもひたすら前に出て、ボディーや顔面に細かいパンチを当て続けた。練習で「大橋地獄」と恐れられた前進に、体格で一回り大きい相手も思わず後ずさり。7回にはダウンまであと一步のラッシュ。終盤に反撃を受けたが、しのぎきった。熱い思いが不屈の闘志にさらに火を付けた。「今日は絶対負けられなかった」。自分が失ってゼロになった中部の王座を取り戻す。さらに直前



判定勝ちし、東洋太平洋スーパーバンタム級のチャンピオンベルトを巻いてガッツポーズする大橋弘政。愛知県刈谷市の産業振興センターあいおいホールで

の東日本大震災の惨状に心を痛めた。「勝手に日本代表のつもりで、勇気を与えたいと思って戦った」。試合後には東日本への支援を呼び掛け、フ

アイトマネーを寄付すると宣言した。

昨年3月に現世界王者の下田昭文(26)と帝拳に敗れ、タイトルを失って1年。だがその間に生まれしたのは失意ではなく、自信だった。「パンチ力なら(タイトルを奪った)ロリー松下、スピ

ードは下田の方があつた」。余裕の再戴冠劇に「経験の差が出た」と振り返った。

防衛し下田に挑戦。次は前回果たせなかった初防衛。「防衛して初

▼大橋弘政 (おおはし・ひろまさ) 1979 (昭和54)年12月31日、名古屋市中川区生まれの31歳。165センチ。同朋大に在学していた2000年5月にHEIWAWAジムに入門し、ボクシングを始める。同年11月プロデビュー。2009年6月、東洋太平洋スーパーバンタム級王座を獲得するが、昨年3月に初防衛に失敗。右ストレートが得意の右ボクサーファイター。対戦成績35戦24勝(15KO)9敗3分け。

フアイトマネー 義援金に

(田中一正)